算命学中庸

【初年】４０回目

４０回目の授業はこのページからです。

授業科目　　〖十二大従星力学〗①

❒ 十二大従星力学（じゅうにだいじゅうせいりきがく）①回目

算命学の強弱をみる技法は、大きく二分しますと……
「旺相休囚死法」と『十二大従星力学』があります。
どちらもその人物が〔強いのか〕〔弱いのか〕を見るものなのですが「旺相休囚死法」に出てきたように、空間と時間がともに揃わないと、強弱は語れないという考え方はおなじです。

☞ 十二大従星力学は『十二大従星表』をつかいます。

『十二大従星表』

① 日干から年支を見て …… 第三従星
② 日干から月支を見て …… 第二従星
③ 日干から日支を見て …… 第一従星

		第三 従星
第一 従星		第二 従星

十二大従星表

癸	壬	辛	庚	己	戊	丁	丙	乙	甲	日干 ＼ 星
巳	午	寅	卯	亥	子	亥	子	申	酉	天報星
辰	未	丑	辰	戌	丑	戌	丑	未	戌	天印星
卯	申	子	巳	酉	寅	酉	寅	午	亥	天貴星
寅	酉	亥	午	申	卯	申	卯	巳	子	天恍星
丑	戌	戌	未	未	辰	未	辰	辰	丑	天南星
子	亥	酉	申	午	巳	午	巳	卯	寅	天禄星
亥	子	申	酉	巳	午	巳	午	寅	卯	天将星
戌	丑	未	戌	辰	未	辰	未	丑	辰	天堂星
酉	寅	午	亥	卯	申	卯	申	子	巳	天胡星
申	卯	巳	子	寅	酉	寅	酉	亥	午	天極星
未	辰	辰	丑	丑	戌	丑	戌	戌	未	天庫星
午	巳	卯	寅	子	亥	子	亥	酉	申	天馳星

「旺相休囚死法」は（月支）を基準にしました。

家系の場所（月支）を基準にして、一家のなかにおいて〔誰が強い〕〔誰が弱い〕というチカラ関係を観ました。

旺相休囚死法 ⇒ 月支を基準

↓

家系のチカラ関係

✏〖十二大従星力学〗は「日干」を基準にします。

宿命のなかで「日干」は自分自身です。

それゆえに、十二大従星力学は自分がどのくらい強いのかを見ます。

十二大従星 ⇒ 日干を基準

↓

本人の性格

性格的に〔気が強い人なのか〕〔気が弱い人なのか〕という大要は十二大従星でみます。

☞「旺相休囚死法」と『十二大従星力学』の強弱の見方は異なります。

つまり、性格的に気が強い人であっても、もしかしたら家のなかでは〔母親にさからえない〕とか〔妻には頭が上がらない〕とか――そういう場合もあり得ます。

反対に、性格的に気が弱い人であっても、家のなかでは〔威張っている〕とか〔自分の意見を言い張る〕こともあり得るわけです。
「家系のなかのチカラ関係」と「本人の性格の強弱」は異なります。

『十二大従星力学』は、“本人の性格的な強さ”ともいえます。それに加えて、本人のエネルギーの強弱も観ていくようになります。

十二大従星 ⇒ 日干を基準

↓

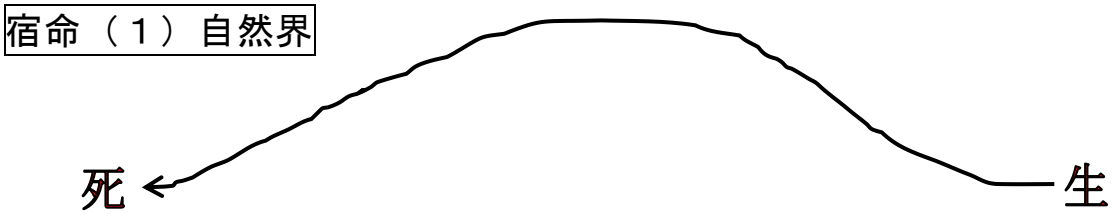
本人の性格

本人のエネルギーの強弱

ここで論じるエネルギーとは“なにか”というのは、この後に出てきますので、そこで説明をします。

☞ 人間の一生を〔例(たと)え〕にして、エネルギーの強弱という観点で考えます。

人間が生れてから死ぬまでを考えると、大雑把(おおざっぱ)にみて、エネルギーの強弱は 宿命（１）自然界 として、おおまかに描いた山の起伏にたとえることができます。



赤ん坊はとても力が弱い存在ですが、だんだん成長して小学生になり、中学生になって、高校生から大人になる過程で体も大きくなり、力も強くなり、精神力も逞(たくま)しくなり、世の中のいろいろな道理(どうり)がわかるようになっていきます。

自分で生きるチカラもだんだんと備わってきます。

参考・道理〔ものごとのそうあるべきすじみち〕

ただ単に体力だけの話ではなくて、自分が生きて行くための総合的なチカラの推移（すいい）を大雑把（おおざっぱ）に描（か）くと、宿命（１）のような姿にたとえることができるでしょう。

参考・推移〔時が経過してゆくこと。時のうつりゆくこと〕

最初は誰でも生きていくチカラは弱いです。
赤ん坊は体力も弱いし、食べ物を自分で食べることができません。親の世話にならなければ生きてゆけません。
幼児期から、だんだん、だんだんと成長するに従って、自分のチカラで生きることができるようになってきて、今度は世の中へでて、仕事始めたり、結婚したり、さまざまなことを経験していくうちに、世の中で活躍できる年代野過程で自分の頂上を見て、そして……晩年期に入ると、肉体も精神も少しずつ衰えて、終焉（しゅうえん）を迎えます。

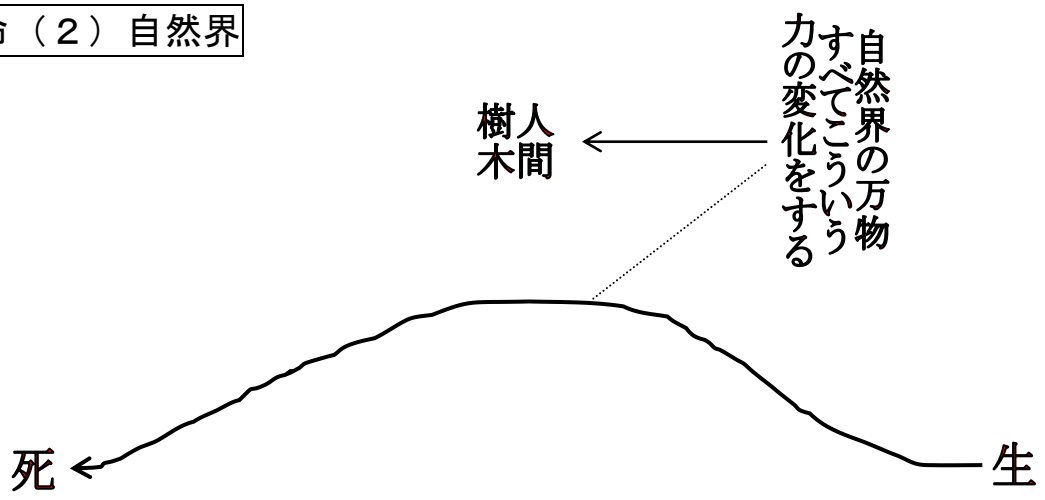
参考・終焉〔死に臨むこと〕

このようなチカラの強弱の推移は、人間だけに限らず、自然の万象（ばんしょう）にも、これとおなじことがいえるのではないかと考えたわけです。

参考・万象〔天地に存在するあらゆるものごと〕

参考・万物〔天地間・宇宙に存在するすべてのもの〕

宿命（２）自然界



自然界の万物（ばんぶつ）は、おおざっぱに観て、このようなチカラ・エネルギーの変化をするはずです。

自然界の一員である人間もおなじです。

樹木も最初から大木ではありません。最初は種から発芽して、それが小さな苗木になり、少しずつ成長して年輪を重ね、天に聳（そび）える大木へ成長します。

その大木も樹齢何百年と重ねる過程で、少しずつ生気（せいき）が衰えて、幹（みき）のチカラもだんだん弱ってきて、最後は枯れて終焉を迎えるでしょう。

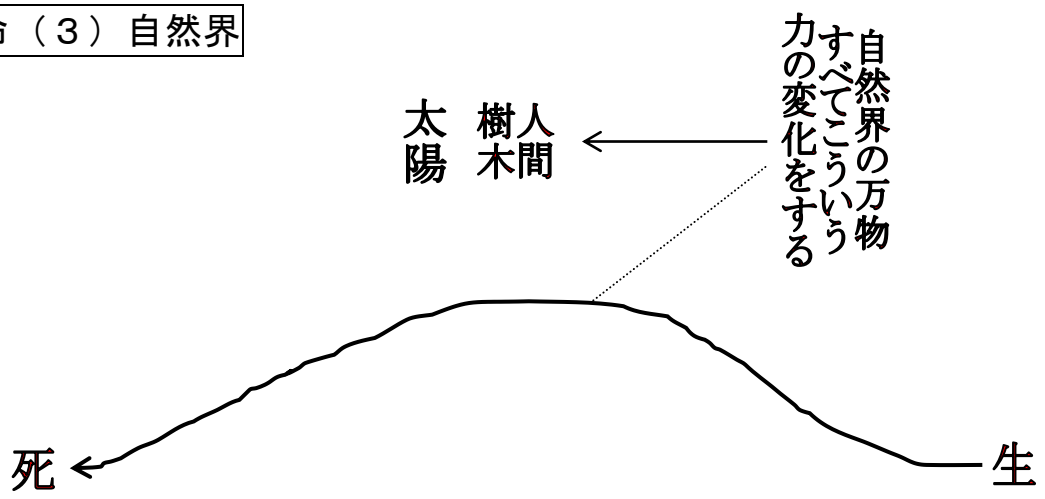
「樹齢（じゅれい）数百年の御神木（ごしんぼく）が台風で根こそぎ倒れた」と報道もありますが、仕方のない自然界の事象といえます。

参考・生気〔いきいきした気力・活気〕

参考・仕方〔なにかに対処すべき方法〕

太陽と自然……。

宿命（３）自然界



自然界の万物（ばんぶつ）は、おおざっぱに観て、このようなチカラの変化をするはずです。

１年間を通してみれば――１年が始まったとき〔立春〕は、まだ寒くて、太陽のチカラ（陽射し）は弱いですが、だんだんと強くなって真夏の太陽となり、秋の季節を迎え、冬になると、太陽のチカラは衰えていきます。

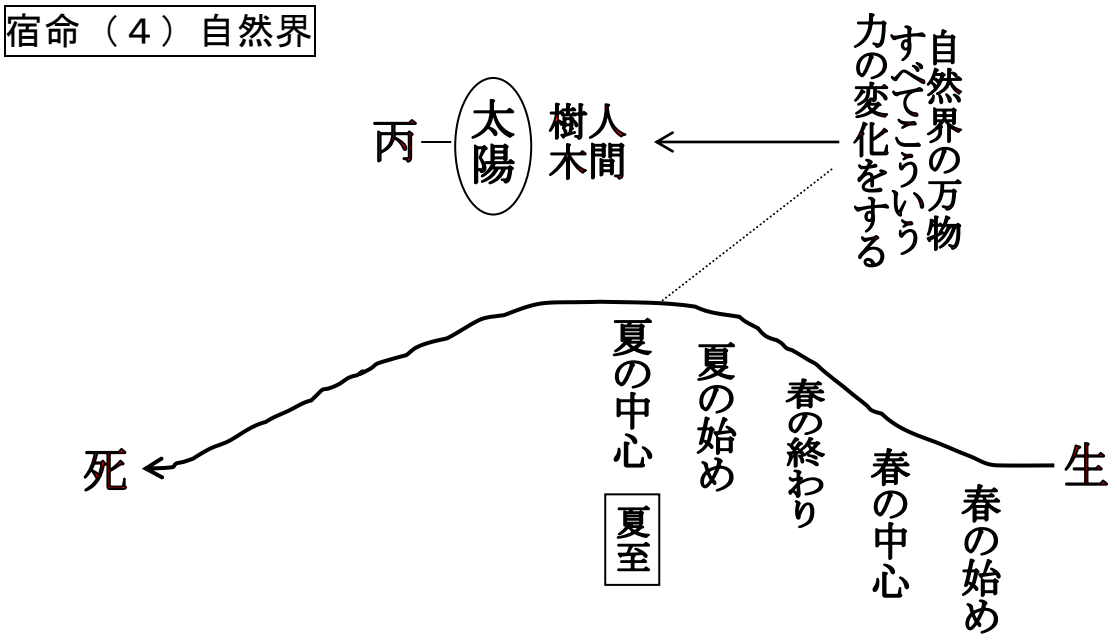
このような変化の姿は、基本的にどのようなものでも、時間の経過なかに存在している。としたのです。

〔この変化の流れを１年間かけて行っている〕と古代の人は考えたわけです。

太陽の寿命はあと 50 億年ほどいう説もあります。

〔たとえば〕ここでは太陽を加えます。

１年間といいましたけど、わかりやすく、春の始めから書きました。十干「丙」は太陽を意味します。



１年が始まったばかりの頃の太陽は、まだ寒いし、陽射しのチカラも弱くて、照時間も少ないです。

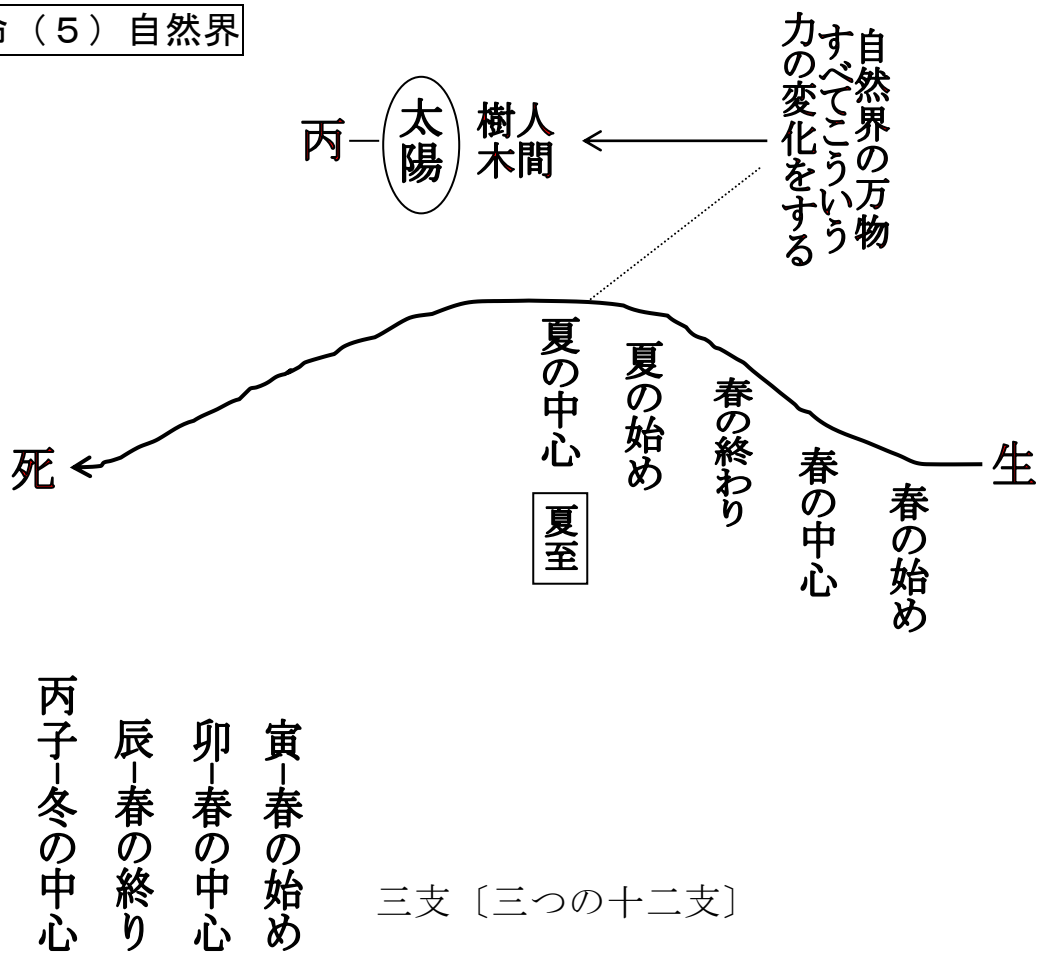
春の中心が来て、春の終わりが来て、夏の始めが来て、夏の中心が来ると、太陽のチカラもどんどん強くなってきます。そして、夏の中心を迎えると、暦の上ではここに 夏至（げし） があります。

夏至は太陽のチカラが最強になるところです。

そして――夏の中心を過ぎると、秋が来て、冬が来てと、いうふうにチカラは衰えていきます。

そのように見てきますと……人間の一生も、太陽の一生も、基本的におなじような変化をするのではないのかと考えたわけです。そして、この事象を人間の宿命に当て嵌めると、つぎのようにいえるわけです。

宿命（５）自然界



太陽「丙」に焦点を当てて考えると、日干「丙火」人が地支に（子水）（寅木）（辰土）という三支をもっていたとします。（子水は冬の中心）（寅木は春の始め）（辰土は春の終わり）の十二支です。

日干「丙火」の人が、（子）と（寅）と（辰をもっていたら、丙火の人物は**（冬の中心のチカラ）（春の始めのチカラ）（春の終わりのチカラ）**を備えていることになります。

☞ あとで技法としてやりますけど……トータルすると、〔どの程度強い太陽なのか〕ということを判別することができます。

１年間（12ヶ月）を 宿命（５）自然界 のような姿として、日干「丙火」の人の宿命に、そのまま当(あ)て嵌(は)めて総計すると、この太陽はどの程度のチカラをもっている太陽です。という判別ができるはずなのです。

『十二大従星』はそういう見方が基本になっています。

ここでは「太陽の 1年 12 ヶ月 というチカラの推移(すいい)も、人間一生の推移もおなじような変化をする」と言っているわけです。

それゆえ、『十二大従星』は人間の一生を十二の時代に区分(くぶん)したものである。

そのように考えておいてください。

『十二大従星』人間の一生を、十二の時代に区分したもの

宿命で『十二大従星』をみるときには、その宿命のなかの樹木は、春の樹木だから、成長する強い樹木だなとか、秋とか、冬の十二支ばかりだから、弱い樹木だなとか、そのように観てゆきます。

樹木のチカラの推移（すいい）も、太陽のチカラの推移も、人間が母親の胎内で育（はぐく）まれ、赤ん坊として生まれ、最後は終焉を迎えるチカラの推移も……自然界の変化とおなじような過程を辿（たど）って行く。と考えているわけです。

それゆえに、最初から人間の一生を、十二の時代に区分して、宿命をこれに当てはめて観ていくわけです。

参考・推移〔時が経過してゆくこと。時のうつりゆくこと〕

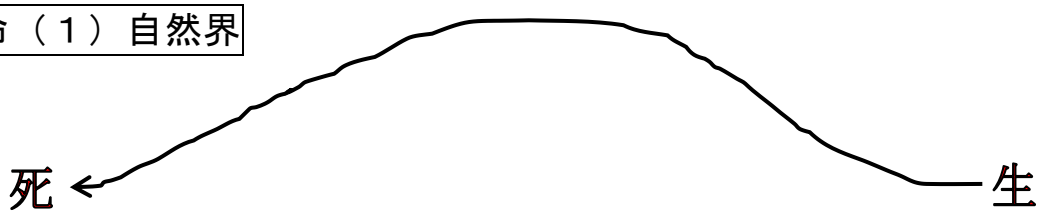
参考・区分〔区別して分けること。全体をいくつかにくぎってわけること〕

参考・辿る〔ある方向へ進んで行く〕

✏『十二の時代』の違いを説明します。

❋ 天報星（てんぽうせい）胎児の時代の星です。

宿命（１）自然界



先ほど、わかりやすいように、人間の一生を山の起伏にたとえまして、宿命（１）自然界 のように〔生から死〕までと書きましたが、この世に生れる前の胎児の時代（母親のお腹に胎児としている時代）から、その人（ひと）の気（き）（その子供の気）は、すでに始まっていると考えているのです。

つまり、どんな人でも胎児の時代を通らないと、この世に生れて来ないわけです。

皆さんも私もかつて胎児の時代が実際にあったのです。

“胎児の時代は無かった”という人はいないはずです。

母の胎内にいるときから、その人の人生はうごきはじめている。そのように算命学では考えます。

“胎児の時代から始まる”ということで、『十二大従星表』も、胎児の時代の星〖天報星〗から記載されています。

❋ 天印星（てんいんせい） 赤子・赤ん坊の時代です。

天印星は赤ん坊の時代です。

この世に生れたばかりの時代です。

❋ 天貴星（てんきせい） 児童（じどう）の時代です。

算命学では〖天印星〗赤ん坊の時代、と〖天貴星〗児童の時代、ここを“境目”として区切ります。

それは〔物心（ものごころ）がついたら児童（じどう）になる〕という基準を設（もう）けて区切っています。物心〔人情・世の中の物事を理解する心〕

多少、子供によって、個人差はあると思いますが……、だいたい３歳か４歳位になれば物心がつくはずです。

もっと早くつく人もいるかも知れませんけど、算命学では、物心がつかないうちは赤ん坊とみなします。

物心がついたら児童（子供）とみなします。

ゆえに〖天印星〗と〖天貴星〗の時代を区切っています。

皆さんも赤ん坊の頃の出来事は、記憶にないでしょう。

「お母さんすごく難産だったから、わたし産道（さんどう）を通るとき苦しかったのよ……」とか、そういうことはまったく覚えていないですよね。

０歳とか、１歳とか、赤ちゃんのときに、すごい熱を出

して大変だったことを、親が子供にいうことはあっても、子供はまったく記憶がないはずです。
なぜ記憶がないかといえば、〔物心がついていない〕からと考えています。
でも、３歳か４歳か、その位になると物心がつきます。
物心がついた後(あと)の記憶は残っているはずです。
このことは人間として大きな違いといえるのです。

＊ 天恍星（てんこうせい・てんぴかせい）少年の時代です。

児童の時代と少年の時代は、どこで区切るかといえば、思春期に入ったら、少年の時代とみなします。
天恍星の少年は思春期に入った時代です。
算命学では、思春期に入ったら児童ではない――少年とみなします。
思春期に入る前の子供と、入った後(あと)の子供では、根本的に性格も考え方も違ってくるとして、人間としての時代が違うと考えています
小さい頃、親の後をいつもついて来て、〔お父さん大好き〕〔ママ大好き〕とか言っていた子供が、思春期に入った

途端に、親と口をきかなくなったりします。
それは子供の時代と、思春期の時代とでは、大きな違いがあるからです。

❋ 天南星（てんなんせい）　**青年の時代です。**
青年の時代、ここから大人になります。
天南星の青年は大人の時代、その第一歩です。

❋ 天禄星（てんろくせい）　**壮年**（そうねん）**の時代です。**
この星は大人でも“中年”と呼ばれるような、そういう時代だと考えてください。
壮年（働き盛り）ですから、若者ではないのです。
ゆえに“壮年”という言葉をつかっています。
天禄星の年齢は目安ですから、多少個人差はありますので、〔30 歳〕〔40 歳〕になったから、もう壮年だというふうに考えていません。
壮年の一つの目安としては“働き盛り”です。

＊ 天将星（てんしょうせい）　家長の時代の星です。

天将星は家長の時代というのは、人生の頂点という意味なのです。人生の頂点・山の頂点です。

その年齢は人によって個人差があります。

〔たとえば〕サラリーマンでしたら、50 代という年齢はその人の一生のなかでは、最も高い地位についているであろうと思われる時代の場合が多いでしょう。

〔60 歳〕で定年退職だとすれば、それまでの 50 代における最後の 10 年間は、その人物の人生の過程において、一番高い地位に就いていて、世の中で一番活躍している時代に相当するはずです。

それが天将星の時代です。

当然一家のなかでは、家長の立場にあるはずです。

ゆえに“家長の時代”という名称がついています。

現在（いま）は平均寿命が長いですから〔60 代で人生の頂点〕という人も当然いるでしょうから、その人物の人生の頂点は、60 代ということになります。つまり、年齢にはそれほどこだわらなくてよいのです。ここで説明している考え方のほうが重要だと思ってください。

❋ 天堂星（てんどうせい）　老人の星です。

これは引退後における老人の時代と考えます。

サラリーマンの人などで、定年退職した後（あと）、あるいは、自営業などの人でも、〔65 歳〕から年金をもらって、老後といわれる時代の暮らしに入ると――天堂星という星の時代・老人の時代と考えます。

❋ 天胡星（てんこせい）　病人の星です。

天胡星の病人は、死（し）の病（やまい）の時代という意味です。

死の病の時代ですから、老人とも呼べない時代です。

わかりやすくいえば、病床にあって、寝たきりの状態になって、あとは死をまつだけです。

そういう時代を、病人の時代と位置づけています。

死の病の時代ですから、ここが現世（げんせ）の最後です。

❋ 最後に三星（さんせい）残っています。

天極星（てんきょくせい）　死人の星です。

天庫星（てんこせい）　入墓（にゅうぼ）の星です。

天馳星（てんそうせい）　あの世の星です。

この３つはいずれも“死後の時代の星”に相当します。
算命学は、人間がこの世で死んで――すぐに人生が終わるのではない。と考えています。
死んだ後も、その人の「気」が「魂」が、〔死人の時代〕〔入墓の時代〕〔彼世(あのよ)の時代〕という三星の時代に残存(ざんぞん)していると考えています。

参考・残存〔残りとどまること〕

三星の違いについては、説明に時間を要しますので、詳しくは、各星のところで説明します。
〔死んだ後の時代〕は、どのようになってゆくのか……という考え方が算命学にあるのです。

『十二大従星』各星(かくせい)の意味合いに基(もと)づいて、人間の一生を１２の段階にわけました。

〔この人は赤ん坊の時代の宿命になっている〕とか――〔この人は宿命に老人の時代の星をもっている〕とか、というように、宿命に当てはめて、その人の性格とか、エネルギーとかを、占っていくようになります。

参考資料

十大主星	十二大従星
貫索星（守備）陽	天報星（胎児）
石門星（守備）陰	天印星（赤子）
鳳閣星（伝達）陽	天貴星（児童）
調舒星（伝達）陰	天恍星（少年）
禄存星（魅力）陽	天南星（青年）
司禄星（魅力）陰	天禄星（壮年）
車騎星（攻撃）陽	天将星（家長）
牽牛星（攻撃）陰	天堂星（老人）
龍高星（習得）陽	天胡星（病人）
玉堂星（習得）陰	天極星（死人）
	天庫星（入墓）
	天馳星（彼世）

02 頁『十二大従星表』に記載されている〖各星のエネルギー〗

〖天報星〗胎児の星　3 点
〖天印星〗赤子の星　6 点
〖天貴星〗児童の星　9 点
〖天恍星〗少年の星　7 点
〖天南星〗青年の星 10 点
〖天禄星〗壮年の星 11 点
〖天将星〗家長の星 12 点
〖天堂星〗老人の星　8 点
〖天胡星〗病人の星　4 点
〖天極星〗死人の星　2 点
〖天庫星〗入墓の星　5 点

エネルギー値は点数であらわします

✍『十二大従星表』の端(はし)に、点数を書き加えておくとよいでしょう。

🔍 ２ページの『十二大従星』に記載されていますように――
まず始めは〖天報星〗です。

✏ 天報星（てんぽうせい） 胎児の時代

天報星 ― 胎児

天報星といえば“胎児の時代”と覚えて頂きたいのです。
『十二大従星』は、各星が織(お)りなす意味合いが重要です。

「十大主星」の授業をしたとき、各星が備えている本能の意味合いが重要でした。
『十二大従星』は“**胎児の時代**”とか“**赤ん坊の時代**”とか“**青年の時代**”とか、各星の“**時代**”が重要になります。
人体図に天報星をもっていたら、天報星そのものの意味合いと、胎児の時代に相当する宿命です。

参考・織りなす〔様々な事柄が組み合わさり、ある状態を作り上げる〕

母のお腹の羊水(ようすい)のなかで、生(な)し遂(と)げようとしている――
『胎児(たいじ)の気(き)』という生命(いのち)の存在を想像してください。
ほかのどの時代よりも、胎児という生命が備える顕著(けんちょ)な特徴があります。　それはどのようなことなのか……と、思(おも)い巡(めぐ)らしてください。
皆さんも、私も、かつて胎児だった頃があります。

参考・遂げる〔成就させる〕

参考・羊水〔子宮の羊膜を満たす透明な液体、なかの胎児を保護し、出産時に破水して、分娩を容易にする〕

参考・顕著〔きわだっていちじるしく、目につくさま〕

参考・特徴〔とくにすぐれたところ。特色〕

参考・部分〔着目する全体を分けて考えた一つ。全体のなかの一つ〕

参考・思い巡らす〔さまざまに考える〕

そうしますと、この胎児の時代がほかのどの時代よりも、すぐれている、勝っているというか、大きな特徴といえるのは、一生のうちで最も大きく成長します。

一生のうち最も大きな成長率

……小さい子供とか、あるいは、自分の子供ではなくて他人の子供、あるいは親戚の子供とか、二・三年ぶりに会ったりすると、「何々ちゃん、チョット見ないあいだに大きくなったわねぇ――」とかいいますよね。
子供はどんどん成長します。１年も会わないと急に成長したように見えます。
ところが――子供の成長率と、胎児の成長率を比較したら比べ物にならないはずです。
胎児のほうは奇跡ともいうべき大きな成長です。

最初は顕微鏡でなくては見えないような細胞が、母親の胎内で、わずか１０ヶ月位の間に、3000 グラム位に成長するわけです。何十万倍、何百万倍という成長率です。
このことからして、一生のどの時代と比較しても、これほど大きな成長率を見せる時代はないのです。
言葉を替えると、つぎのように表現できます。

一生のうち最も大きな変化をとげる

それが胎児の時代であるはずです。

成長率もさることながら、見た目も大きく変化します。
最初は肉眼では見ることができなかった細胞が、わずか１０ヶ月位の間に、手足がきちんと整って、肉体のなかに五臓がきちんと出来上がって――何ヶ月かのあいだにその姿はまったく変化します。
これほど大きく変化する時代はほかにないのです。

それゆえに、つぎのようにもいえます。
胎児（まだこの世（よ）に生命をうけていません）から、人間として生きている現世（げんせ）の時代に比べれば不安定な時代です。
胎内で生存していても……分娩時に生命を宿して産まれて来るのかどうか、わからない不安があります。

もしかすると……なにかの事情で、生命を絶たれてしまうかも知れません。
その意味では、ほかの時代よりも不安定なのです。
これらのことを考慮すると、胎児が生命を絶たれなければ、3000 グラムという偉大な変化を遂げて大きく成長します。しかし、そこに辿り着く過程には“不安定な時代”が横たわっていたわけです。

不安定な時代

↓

変転変化の星

↓

人生に変化が多い

天報星は“変転変化の星”とも呼ばれています。

天報星は、最も大きく変化して、不安定な時代を経過(けいか)して、生まれてくる星です。

それゆえに、天報星をもっている宿命は、運勢の上でも変化が多いといえます。

波乱に富んだ人生といってもよいでしょう。

参考・横たわる〔進む妨げになって存在する〕

参考・変転〔かわりうつること。まったく違うほかの姿になること〕

参考・変化〔時間・空間的推移によって、物事の状態に違いが現れること〕

参考・経過〔物事のうつりゆく状態〕

☞ どのような変化なのか――それはわかりません。

〔たとえば〕仕事がたびたび替(か)わる人生の変化なのか、結婚を何回もするという変化なのか、生き方自体、あるいは、人生観がどんどん変わるのか、そのことは天報星だけではわかりませんが、いずれにしても、普通の人よりも、変化が多い人生になります。
性格的にも“移り気”といえる変化が多いので、気まぐれなところがあります。

〔たとえば〕さっきは映画を観に行こうといったのに、チョット気が変わって、「やっぱりこれやめて、あっちにしようよ」というふうに、とっさの思いつきで、目的を変えるとかの性格になります。

参考・移り気〔興味の対象が変わりやすいこと〕

参考・気まぐれ〔定まった考えがなく、その時々の気分で、心が動かされやすく、思いつきで行動するさま〕

それゆえに、移り気で気まぐれな人になるわけですが、天報星をもつ人自身は、ことさら意識して気が変わって

いるわけではないし、悪気があってやるのではなくて、自然に変化してしまうわけです。
“自然に気が変わっちゃった”としか、いいようがないわけです。
これがその人の“好(よ)さ”でもあるし、欠点にもなる質でもあるのです。
それゆえに〔いいとも〕〔悪いとも〕いえないのです。

精神的にも不安定な星

精神不安定という意味は、精神病とは違いまして、この星の人は、もともと精神的に不安定なのです。
〔たとえば〕普通、世間でいうところの精神不安定は、何か悩み事があったり、普段ストレスが強かったりして、“精神が不安定になる”ということを指すと思いますが、そうではなくて、もともと精神構造が不安定に出来ていると考えています。それゆえに、気が変わりやすいし、考え方も変わりやすい――朝、こうするといったのに、夜になると、また違うことをいい出すとか、そのような側面をもっています。でも、これが本来の姿なのです。

☙ 人体図を書きました。

蓮池薫 1957(s32)-9-29

	調舒星	天報星
禄存星	牽牛星	牽牛星
天堂星	石門星	天報星

曽我ひとみ 1959(s34)-5-17

	貫索星	天報星
牽牛星	調舒星	牽牛星
天報星	貫索星	天将星

曽我さんは、天報星が二つあります。

蓮池さんも天報星が二つあります。

『十二大従星』は、誰でも３つしかないわけです。

三つのうち、天報星が２つもあれば、半分以上を天報星で占めている人体図ということになります。

人体図に、変転変化の星が２つあるというのは、算命学では、「動乱の英雄」という名称がついています。

天報星２つ

↓

動乱の英雄 ⇒ 非常に波乱の多い人生

非常に波乱の多い人生になる可能性があります。
動乱の英雄といえば、カッコウヨイですが、「あだ名」のようなもので、本当に英雄になるのかどうか――わかりません。でも非常に波乱の多い人生になります。

算命学のなかで、特に波乱の人生となる典型的な宿命は天報星２つある人です。
天報星は１つあっても、普通より波乱が多い人生、変化が多い人生になりますから、２つもあれば、すごい波乱の生涯という人生になります。

✑ 拉致被害者の有本恵子さんは、すでに亡くなったと、北朝鮮が発表している方ですが、有本恵子さんも天報星２つです。
そして、久米裕さんという方も、亡くなったという発表ですが、その人も天報星が２つあります。

有本恵子さんは北朝鮮で石岡さんという男性と結婚して、その後に亡くなったといわれているのですけど、石岡さんという男性も天報星を１つもっています。

横田めぐみさんも、天報星をもっています。
横田めぐみさんのお父さんも天報星をもっています。
拉致被害者のなかには、天報星をもっている人はとても多いです。
しかも、わずかこの十何人のなかに、天報星２つもつ人は“動乱の英雄”と呼ばれますが、動乱に巻き込まれる確率が高いのです。
非常に波乱の多い人生になるというのは、動乱に巻き込まれて、波乱が多くなりやすいともいえるわけです。

拉致だけが全てではありません。事故などには要注意です。交通事故に何回も遭っていれば、それだけで波乱の人生です。これは自分から事故を起こしてもおなじです。運勢的に事故とか事件とかに遭いやすいのです。

しかし、悪い事ばかりではありません。
〔たとえば〕蓮池さんは、中央大学に通っていて、学生時代に新潟に里帰りして拉致されたことで、波乱の人生を歩んだわけですが――。
〔例えばの話として〕このような人物が普通に学校を卒業

して、会社に入って人生を歩むとしたら、どういう会社に入社すれば、宿命に沿うとおもいますか――？

人生に変化・波乱が多い人物です。

つまり、波乱の宿命に適した会社というのは、変化が多い会社と考えるとどうでしょう――？

つまり、転勤の多い会社、商社なんかが一番いいですね。

２、3年ごとに世界のあちこちへ転勤させられるとなれば、それだけで変化の多い人生です。

そのような生き方は合っています。

転勤の多い会社であれば、出世していくでしょう。

それは宿命に合っているからです。

このことは、天報星１つの人でもいえます。

転勤の多い会社には向く

実際に転勤の多い会社に入って転勤族になれば、それだけで人生に変化が多い宿命を消化しているようなものなので、事件や事故には、巻き込まれないようになります。

それゆえに、人体図を見て、１つでも天報星がある人には、こういう仕事は合っています。

天報星が２つもあるのなら、とにかく変化の多い仕事を勧(すす)めることです。
あっちこっちへ出張が多いのでもよいですね。

2010年に芸能レポーターの梨本さんは亡くなりましたが彼は天報星２つです。レポーターはあっちこっちへ行かなければ仕事になりません。
夜中だろうと、事件が起こる、醜聞(しゅうぶん)が起ったら、張り込みをして、当事者にマイクを向けることもあるでしょう。
そのような仕事は向いています。
何らかの形で……天報星の変化・波乱を消化しなくてはいけないということです。
そうであるなら、仕事で消化するのは最適です。

よく「若い人は未来がたくさん残っていて、可能性がすごく大きいから、若い時はいいよね」とかいいますが、将来に対する可能性をいうのであれば、若い人よりも、もっと小さな子供のほうが、将来どんな道に進むのか、どんな人と結婚するか、いろいろな可能性が残されていますよ。さらに――可能性ということで突き詰めれば、

生れる前の“胎児”のほうが、可能性は無限と言い切れるほど、広がっています。

現在(いま)は、早ければ妊娠16週くらいで、胎児の性別がわかります。確認しやすいのは24週目くらいだそうです。

それが判明するまでは、男なのか、女なのかという両方の可能性もっています。

堕胎(だたい)は３ヶ月くらいまでということですから、３ヶ月のあいだに、胎児の生命がどのようになるかもわからないわけです。

その意味を加味すると、最も未来に対する可能性を多くもっているのは“胎児の時代”であるはずです。

一生のなかで、将来に対する可能性を最大にもつ時代

参考・可能性〔できる見込み〕

胎児の時代の特に六ヶ月くらいまでは、人間の一生のなかで、将来に対する可能性を最も多くもつ時代ともいえます。

〔たとえば〕その時期を過ぎて、性別がわかったとしても、胎児がお腹にいるとき――親としては〔どんな子供

が産まれて来るのだろう……〕〔どんな顔かしら……〕〔元気に産まれて来てくれるだろうか……〕いろいろなことを考えたりもするでしょう。

そのように想い浮かべるのも、胎児がさまざまな可能性をもっているからです。

そうしますと、ほかのどの星よりも、可能性だけは多くもっている星であり、その可能性のなかに、いろいろな才能を秘めているのです。

一生のなかで、将来に対する可能性を最大にもつ時代

↓

多芸多才の質をもつ

そのことからして、多芸多才の質をもっている星です。

これも天報星の特徴の一つです。

補足すれば、種々の可能性と才能を秘めている星です。

色とりどりの可能性、才能を秘めている

胎児なので、海のものとも、山のものとも、決まっていない時代だからこそ、どんな生き方でも可能です。

多くの可能性、才能を秘めていると考えていますので、天報星をもっている人は、何をやらせても、それなりに上手にこなします。

器用

↓

ただしエネルギーは３点と弱いので、同時にいくつもの事に手を出すと、どれも中途半端で終わる

たいていのものは器用にこなせます。
種々の可能性をもっていますけど、赤ん坊にも満たない胎児なので、エネルギーは弱いのです。
エネルギーが弱いという質は、天報星の人が、特に気をつけなくてはいけないところです。
さまざまな可能性秘めていますが、胎児なので、ほかの星よりもエネルギーはかなり弱いです。
人間として形成された体力がない、そういう時代の星でありながら、器用なので、あれをやってうまくいった、これもやってみたら上手に出来たと、いくつものことに同時に手を出しやすいわけです。

ところが、そのように手を出してしまうと、結局は自分自身が息切れしてしまって、どれも中途半端で終わってしまいます。エネルギーが弱いからです。

天報星は“多芸多才“といっていますが、一芸に絞ったほうがよいのです。

一芸にしぼったほうが大成できる

多芸多才ですが、そのなかでも、一芸にしぼったほうが、結果的には伸びてゆきます。
エネルギーが少ないので、１つのことに集中したほうがよいわけです。
天報星をもつ人が〔伸びるか〕〔伸びないか〕という境目は、おおかたこの要因で決まります。

一芸に絞っている人のほうが、結果的に伸びていきます。あれにも手を出して、これにも手を出して、と、やっている人は、結局はどれもたいしたことなく、終わってしまいます。趣味でも、仕事でも、何でもそうです。

異性関係もそうです。
器用なので、相手の気持ちを引き寄せるのも上手です。
しかし、あっちとお付き合い、こっちともお付き合い、ということをしていると、結局は全てうまくいかないで、終わってしまいます。
1人に焦点を合わせたほうが、結果的に幸せになれます。

☞ ほかの時代にはない〖天報星〗だけの特徴があります。天報星は母親のお腹のなかにいる時代です。
そうしますと、妊娠したときの――母親の生き方、あるいは、そのときの状態がそのまま胎児に影響します。

例(たと)えていえば古い話ですが――サリドマイド児(じ)といいまして、お母さんが妊娠中に悪い薬を飲んだために、それが胎児に悪影響して、身障者の赤ちゃんで生れて来てしまったという事件がありました。
母親のお腹のなかにいますから、お母さんが栄養失調になれば、胎児も栄養が不足します。
お母さんが、毎晩お酒飲んで酔っ払っていたら、胎児もその影響を受けてしまいます。

お母さんが悪い薬を飲んだら、胎児に影響します。
それとおなじことが『気』のうえで起こります。
〔たとえば〕母親の男性関係が乱れていたら、その男女の『気』が及ぼす影響が、そっくり胎児に入ってしまいます。
母親の生き方が間違っていれば、その間違いが天報星をもって生まれてきた子供の人生に影響してしまうのです。

具体的にいいますと――。
〔たとえば〕女性が妊娠しました。だけど、その女性にも父親が誰なのかわからない。自分のお腹に子供を身籠もったお母さんにも、父親が誰なのかわからないという状況で、天報星を持っている子供が生まれたとします。

父親が誰だかわからない

そういう場合もあり得るでしょう。

あるいは、誰だかわかっているけど、それは不倫相手の男性の子供でした。
夫の子供ではなくて、ほかの男性の子供です。

夫以外の男性の子供である

あるいは――父親は夫です。子供は欲しくなかったけど、妊娠したので仕方なく生みました。

欲しくなかったのに、妊娠したので仕方なく生んだ

〔たとえば〕夫婦仲悪くて、もう別れようかと思っていたので、子供は欲しくなかった。でも妊娠してしまったために、仕方なくイヤイヤ生みました。という場合も入ります

〔出来ちゃった結婚〕ですが……子供が出来ちゃった、嬉(うれ)しいから結婚しましょう。これは問題ないのです。
ところが、〔子供が出来ちゃった〕仕方なく結婚したとなると、そこには問題点が横たわっていることもあり得るわけです。

そうしますと、問題が横たわっている状況で、天報星をもった子供が生れて来ますと、天報星の子供の人生が曲がります。

天報星の子供の人生が曲がる

↓

特に結婚

“子供の人生”と書きましたけど、特にその子供の結婚です。

先ほど挙げた、好ましくない状況のいずれかの範疇で、天報星の子供が産まれてきたら、それだけで子供の将来における結婚は、うまくいかないと考えていいのです。
その子供の結婚に関して人生が乱れます。
と占っていいのです。

最も悪いのが、母親が売春婦だった場合です。
母親が売春婦で天報星の女児（じょじ）が生れると、売春婦になる可能性がとても高いです。
女の子に限らず、男の子でも、そういう人生を歩むようになっていきます。

そのような意味合いからして〔結婚しないほうが……〕よいのかどうか、それはわからないのです。
〔結婚してもうまくいきません〕ということはえます。
それなら〔しないほうがましなのかどうか〕――それは本人が決めるしかないでしょう。

☞ 主として、結婚を挙(あ)げましたけど――このことがダメになると、さまざまなことに波及します。
〔たとえば〕結婚がうまくゆかなくなることで、仕事にも影響するでしょう。
人生が乱れる起因(きいん)にもなります。

☞ 結婚以外のことは、別の話しです。
天報星という星の質だけでいえば、いままで挙げたように考えられますが、人体図の星はほかにもあります。

それゆえに、結婚で人生が乱れても、“財運はすごく強い”という宿命もあり得ます。

宿命に“すぐれた質、あるいは良い質をそなえている”ということもあります。天報星が全てではないのです。
そこを考え違いしないで頂きたいのです。

ここでは、星の一つ一つの意味合いだけをご説明しています。
総合的な観方は、また後で勉強いたします。

☞ 念のために、もう少し申し上げますと……いずれにしましても、母親の生き方です。
父親の生き方は、乱れていても大丈夫です。
お母さんの妊娠中に、お父さんが別の女性と浮気しても、天報星の人生に問題はないです。

母親が悪い薬飲めば、間違いなく胎児に影響します。
父親が悪い薬飲んでも、胎児に影響しませんとは断言できませんが、主となるのは母親です。

☞ つぎのような質問もあります。
「お母さんが誰と関係をもったのか、誰にもいわないでお母さんだけしか知らなかったとしても、悪い影響としてそうなりますか？」
これは「気」の話ですから〔いう〕〔いわない〕は関係ないのです。
〔いわなくても――〕運気のなかに、そのときの事象の「気」が残存（ざんぞん）します。
算命学は「気の世界」であり、『気』の勉強です。
それゆえに、宿命に天報星をもっていて、懸念のある方

は、お母さんにきちんと、訊(き)いておいたほうがいいかも知れませんね。
「どういう事情で、わたしを生んだの……」

☞ 天報星のエネルギーの使い方にとかついては、この後の授業で〔身強 みきょう〕〔身弱 みじゃく〕という言葉が出てきます。身強・身弱についての勉強をしますが、そこで説明をします。

人体図の身強・身弱は、占うときに、必ず観なくてはいけない技法です。

02 頁『十二大従星表』に記載されている〖各星のエネルギー〗を見ておわかりのように、エネルギーが弱い星は天報星だけではなくて、ほかにもあります。
天報星より、弱いエネルギーの星もあります。
エネルギーが〔強い〕〔弱い〕にも、いいとか、悪いとかはありません。

☞ 天報星は“胎児の時代”です。
ほかの時代に比べて〔どのような特徴があるのか〕と、いうふうに考えてゆくと、天報星をもつ人物の性格とか、運勢とか、そういったものが出てくるようになります。

☞ 天報星についてご説明しました。
このような考え方で〖十二大従星力学〗は成り立っています。
ここでの考え方に慣れていただくと、ほかの星も理解しやすいと思います。

【初年】４０回目〖十二大従星力学①〗 終わります

つぎの授業 ⇒【初年】４１回目〖十二大従星力学②〗です。